愛知教育大学研究報告，58（教育科学編），pp，107～113，March，2009

中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連
～仲間集団の形成・所属動機という観点から～

石田靖彦*　小島　文**

*学校教育講座（心理学）
**挙母小学校

Relationship between Structure of Informal Group and Friendship among Junior High School Students.

Yasuhiko ISHIDA* and Aya KOJIMA**

*Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan
**Koromo Elementary School, Toyota 471-0065, Japan

問題と目的

友人関係に関する発達的研究によれば，児童生徒の友人関係は小学校中高学年頃より大きく変容することが指摘されており（Rubin, Bukowski, & Parker, 1998），そのもっとも顕著な変容はクリークと呼ばれる仲間集団の出現であるといわれている（Crockett, Losoff, & Perterson, 1984）。クリークは，通常，3名から10名程度の同性のみで構成され，彼らは日常の多くの時間をこのクリークとともに過ごし，ほとんどの相互作用をこのクリーク内で行っていることが指摘されている（Kinderman, McCollom, & Gibson, 1995）。つまり，彼らにとってクリークはいわば生活集団として機能しているわけである。

このような仲間集団については，日本でも学級内の友人関係においてしばしば指摘されてきた。たとえば，学級内のソシオメトリック構造に関する研究によれば，小学校高学年頃から行動をともにする相手が限定されるようになり，学級内には少人数で構成される固定化された仲間集団が形成されるようになることが指摘されている（井森 , 1997; 井上 , 1992）。また中学生を対象とした研究でも，このような仲間集団は男女によって多少の違いはあるものの，依然存在することが報告されており（石田 , 2002; 楠見 , 1986），さらに女子では高校や大学においても，ほとんどの生徒が仲間集団に所属し，学校での多くの活動をその仲間集団の成員とともに行っていることが明らかにされている（天野 , 1985; 永沢 , 1969; 佐藤・落合 , 1993）。欧米では，このような仲間集団は青年期頃から徐々に融解し，異性も交えた複数の集団が緩やかに結ばれた構造へと変容していくことが指摘されているが（Shrum & Cheek, 1987），日本での仲間集団は欧米にくらべて長期にわたることが示唆される。

このように，児童期から青年期にかけて多くの時間を共有し多くの活動をともにする仲間集団は，彼らにとって重要な意味をもっている。仲間集団に所属できるかどうかは彼らにとって大きな関心事であるし，仲間集団に所属できるかどうかが，登校意欲や学校での適応にも大きな影響を及ぼしたり，さまざまな対人的なトラブルの原因やいじめの原因になり得ることが指摘されている（本間 , 2000; 保坂 , 1993; 三島 , 2004; 佐藤 , 1995）。

このような仲間集団における問題については，仲間集団の構造，とくに集団の閉鎖性や排他性の高さが指摘されてきた（三島 , 2004; 佐藤 , 1995）。学級内で形成される仲間集団は，集団内では高い親密性を持ちながら，集団外の成員に対しては閉鎖的，排他的であり，しかもこのような集団は一旦形成されると固定化されることが多い。そのため，集団内でトラブルが生じても集団を離脱することはむずかしく，問題をさらに深刻化させていると考えられる。

ところで，このような仲間集団の特徴には顕著な男女差のあることが明らかにされている。たとえば楠見（1986）は学級内の仲間集団の構造について検討し，男子の仲間集団は比較的大きく，選択が一部に集中する階層性の高い仲間集団を形成するのに対し，女子は少人数からなる相互に独立した集団を形成する傾向のあることを指摘している。同様に石田（2002）も中学生

の仲間集団の構造について検討し，男子では複数の集団に所属する生徒が多く，集団同士がつながりをもっていたのに対し，女子の集団は相互に独立していることを明らかにしている。このような仲間集団の特徴の男女の違いは，ひいては仲間集団との関わり方や付き合い方にも影響を及ぼすと考えられる。

また仲間集団の特徴における男女差の背景には，友人関係への志向性や仲間集団の形成動機の違いが影響していることも指摘されている。これまでの研究によれば，女子は男子にくらべて親和的で情緒的な関係を志向する傾向が強く（Karweit & Hansell, 1983），仲間集団の形成に関しても，男子では何をするかといった遊びや活動自体を中心に集団が形成される傾向があるのに対し，女子では活動よりも情緒的なつながりをもとに集団が形成されることが報告されている（石田，2003）。さらに女子では，情緒的で親密な繋がりを求める積極的な動機だけでなく，“ひとりで浮いた存在になりたくないから”といった消極的な動機に基づいて仲間集団に所属する生徒も多く，このような動機が高い生徒ほど閉鎖的で固定的な仲間集団を形成しやすいことが明らかにされている（大嶽，2007; 佐藤，1995）。つまり，友人関係に対する志向性や仲間集団の形成動機は，どのような仲間集団を形成し所属するのかという仲間集団の構造や特徴に影響し，さらにその集団の構造や特徴が仲間集団との関わりや付き合い方にも影響していると考えられる。

しかしながらこれまでの研究では，仲間集団にまつわる問題が生じやすい女子のみを対象としたものが多く，仲間集団の形成動機や仲間集団の特徴や構造，さらには仲間集団との関わりや付き合い方について，男女を含めた研究は少ない。

そこで本研究では，仲間集団の特徴や構造に焦点をあて，集団の特徴や構造は男女でどの程度異なるか，またその特徴や構造は集団の形成動機や集団との関わり方とどのように関連するのかについて，中学生を対象にして検討する。

方　法

調査対象者　中学生１年生248名，2年生138名の計386人に質問紙調査を行なった。データに無回答があった19名を除いた367名（男子156名，女子211名）を分析の対象とした。

調査内容

1．所属する仲間集団の有無と構成人数

「あなたは，学校で一緒に教室移動したり休み時間に一緒にいるような決まった友人グループがありますか」という質問に対し「はい」「いいえ」の２件法で回答を求め，所属する仲間集団がある人については，さらに仲間集団の構成人数の回答を求めた。

2．仲間集団の特徴

石田・吉田（1999）の学級構造の認知尺度や黒川・三島・吉田（2006）の集団透過性尺度などを参考にして，仲間集団の特徴に関する14項目を作成した。回答は「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の５件法であった。

3．仲間集団との関わり

黒川他（2006）の集団透過性尺度や落合・佐藤（1996）の友達とのつきあい方尺度などを参考にして，仲間集団との関わりに関する21項目を作成した。回答は「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の５件法であった。

4．仲間集団の形成・所属動機

佐藤（1995）の仲間集団に所属している理由尺度から抜粋した14項目を使用した。回答は「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の５件法であった。

結　果

1．尺度の構成

（1）仲間集団の特徴

仲間集団の特徴に関する14項目について最尤法による因子分析を行なった。固有値の減衰状況は3.6，2.5，1.8，1.2…であり，固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から３因子解が適当であると判断した。プロマックス回転後の因子負荷は Appendix １に示した。

第１因子には，「グループには，中心的な存在がいる（.63）」，「グループの中で，意見を言う人と言わない人が分かれている（.61）」など高い負荷量が認められた。これらの項目は，仲間集団にリーダーを中心とする階層的な構造に関する因子と考えられるので，「仲間集団の階層性」因子とした。第２因子には，「グループ以外の人を仲間に入れてあげないという雰囲気がある（.67）」，「他のグループの人が自分のグループに入ってくることをいやがる人がいる（.64）」などに高い負荷量を有した。これらの項目は，自分の仲間集団以外の集団と交流をもたず自分の集団の中に閉じこもる因子と考えられるので，「仲間集団の閉鎖性」に関する因子とした。第３因子には，「グループのみんなは仲が良い（.60）」，「グループの団結力はつよい（.57）」などに高い負荷を有した。これらの項目は，仲間集団での結束力や仲の良さに関する因子と考えられるので，「仲間集団の凝集性」に関する因子とした。

当該因子にのみ .35以上の負荷を有することを基準とし各下位尺度を構成した。下位尺度の内的整合性は，仲間集団の階層性で $\alpha = .71$，仲間集団の閉鎖性で $\alpha = .71$，仲間集団の凝集性は $\alpha = .64$であった。

（2）仲間集団との関わり

仲間集団との関わりに関する21項目について最尤法による因子分析を行なった。固有値の減衰状況は4.2，2.9，2.3，1.4，1.1…であり，固有値の減衰状況と

因子の解釈可能性から３因子解が適当と判断した。プロマックス回転後の因子負荷は Appendix ２に示した。

第１因子は,「私は，グループ以外の友だちとも仲良くしている（.85)」,「私は，グループ以外の人とも友達でいると思う（.83)」などの項目が高い負荷を有した。これらの項目は，自分の所属する仲間集団以外の友人とも交流することに関する因子と考えられるので,「仲間集団外への開放性」に関する因子とした。第２因子には,「グループの友だちとは，気持ちが通いあっている（.75)」,「グループの友だちとは何でも本音で話し合っている（.69)」などの項目が高い負荷量が示されていた。これらの項目は，友達を信頼し本当の姿を見せ合う関わりを示していると考えられるので,「仲間集団に対する信頼感」に関する因子とした。第３因子には「友だちに仲間はずれにされないかと不安になる（.74)」,「友だちからどう思われているか気になる（.71)」などの項目が高い負荷量を示した。これらの項目は，友人からの拒否や孤立に対する不安や心配を表すと考えられるため,「仲間集団から拒否不安」に関する因子とした。

当該因子にのみ .35以上の負荷を有することを基準とし各下位尺度を構成した。下位尺度の内的整合性は，仲間集団外に対する開放性でα＝.82，仲間集団に対する信頼感でα＝.76，仲間集団からの拒否不安でα＝.77であった。

（３）仲間集団の形成・所属動機

仲間集団の形成・所属動機に関する14項目について最尤法による因子分析を行なった。固有値の減衰状況は第１因子から5.1，3.6，0.8，…であり，固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から２因子解が妥当と判断した。プロマックス回転後の因子負荷は Appendix ３に示した。

第１因子は,「グループでいないと，周囲から浮いているように見えるから（.85)」,「グループに入っていないと教室にいづらいから（.79)」などの項目に高い負荷を有し,“ ひとりで浮いた存在になりたくない ”といった消極的な動機に関する因子と考えられたため,「消極動機」因子とした。第２因子は,「グループだとお互いによく知っているので相談しやすいから（.84)」,「グループの中では安心してなんでも話せるから（.79)」などの項目に高い負荷を有し，情緒的な繋がりやサポートを追求する積極的な動機に関する因子と考えられるため,「積極動機」因子とした。

当該因子にのみ .35以上の負荷を有することを基準として各下位尺度を構成した。下位尺度の内的整合性は，消極動機でα＝.91，積極動機はα＝.88であった。

2．仲間集団の特徴における男女差

仲間集団を有する生徒の割合は，男子で156名中130名（83.3%)，女子で211名中181名（85.8%）で，男女いずれも８割以上の生徒が仲間集団に所属していることが示された。仲間集団を有する生徒の割合に男女差は認められなかった（$\chi^2(1) = .42$, *ns*)。

仲間集団の構成人数や仲間集団の特徴の男女差については，仲間集団を有する生徒321名（男子130名，女子181名）を対象として分析した。男女別の仲間集団の構成人数と仲間集団の特徴の平均値を Table 1，仲間集団の各指標間の相関を Table ２に示す。

各指標の平均値の比較では，構成人数（$t(210.34) = 4.51$，$p < .001$)，閉鎖性（$t(308.49) = 2.58$, $p < .05$）で有意差が認められ，男子の仲間集団は女子の仲間集団にくらべて，構成人数が多く閉鎖性が低いことが示された。階層性，凝集性では有意差はなかった（$t(309) = .08$; $t(309) = .85$)。

Table 1　仲間集団の特徴の平均値

	男子（*n*=130）	女子（*n*=181）
構成人数	4.98（2.27）	3.94（1.52）
階層性	2.63 （.61）	2.62 （.68）
閉鎖性	2.28 （.48）	2.45 （.65）
凝集性	3.88 （.62）	3.94 （.62）

注： 括弧内は標準偏差

Table 2　仲間集団の特徴間の相関

	構成人数	階層性	閉鎖性	凝集性
構成人数		.13	.27 **	.28 **
階層性	.26 ***		.19 *	−.05
閉鎖性	−.04	.41 ***		.02
凝集性	.22 **	−.06	−.06	

注1： 右上段は男子，左下段は女子の相関係数を示す
注2： *** $p<.001$， ** $p<.01$， * $p<.05$

各指標間の相関については，男子で構成人数と閉鎖性（$r = .27$, $p < .01$)，凝集性（$r = .28$, $p < .01$）に低い有意な相関が認められ，男子の仲間集団では人数が多いほど閉鎖性や凝集性が高いことが示された。また閉鎖性と階層性に低い有意な相関（$r = .19$, $p < .05$）が認められ，閉鎖的な集団は階層性が高いことが示された。

女子では，構成人数と階層性（$r = .26$, $p < .01$)，凝集性（$r = .22$, $p < .01$）に低い有意な相関が認められ，女子の仲間集団では人数が多いほど階層性，凝集性が高いことが示された。また閉鎖性と階層性に中程度の有意な相関（$r = .41$, $p < .001$）が認められ，閉鎖的な集団ほど階層性も高いことが示された。

3．仲間集団の形成･所属動機が仲間集団の特徴，仲間集団との関わりに及０ぼす影響

仲間集団の形成・所属動機が仲間集団の特徴，及び仲間集団との関わりに及ぼす影響については，（１）仲間集団の形成・所属動機が仲間集団の特徴に及ぼす影響と，（２）仲間集団の形成･所属動機が仲間集団の特徴を媒介として仲間集団との関わりに及ぼす影響に分けて分析した。なお分析に先立って，仲間集団の形成･所属動機における男女差について検討したところ，女子は男子にくらべて，積極動機（$t(309)=2.01, p<.05$），消極動機（$t(309)=3.52, p<.001$）のいずれも有意に高いことが示された。

（１）形成・所属動機が仲間集団の特徴に及ぼす影響

仲間集団の特徴に関する各指標を基準変数，仲間集団の形成・所属動機を説明変数とする重回帰分析の結果を Table ３に示す。

Table ３　仲間集団の特徴に関する重回帰分析結果

	構成人数	階層性	閉鎖性	凝集性
男子（n=130）				
積極動機	.07	.21 *	−.01	.42 ***
消極動機	−.03	.00	.11	−.08
R^2	.01	.04 †	.01	.16 ***
女子（n=181）				
積極動機	.19 **	−.08	−.15 *	.39 ***
消極動機	−.17 *	.21 **	.16 *	−.20 **
R^2	.06 **	.05 *	.04 *	.18 **

注：*** $p<.001$，** $p<.01$，* $p<.05$，† $p<.10$

男子では積極動機から仲間集団の階層性（β＝.21, $p<.05$）と凝集性（β＝.42, $p<.001$）に有意な正の影響が認められ，積極的な理由で仲間集団を形成・所属している生徒ほど階層性，凝集性が高い仲間集団に所属していることが示された。消極動機については有意な影響は示されなかった。

女子では，積極動機から構成人数（β＝.19, $p<.01$），凝集性（β＝.39, $p<.001$）への正の影響と閉鎖性（β＝－.15, $p<.05$）への負の影響，また消極動機から構成人数（β＝－.17, $p<.05$），凝集性（β＝－.20, $p<.01$）への負の影響と，階層性（β＝.21, $p<.01$），閉鎖性（β＝.16, $p<.05$）への正の影響が認められ，積極的な理由が高い生徒ほど構成人数が多く，凝集性が高く，閉鎖性の低い仲間集団に所属していること，逆に消極的な理由が高い生徒ほど構成人数が少なく，階層性，閉鎖性が高く，凝集性の低い集団に所属していることが示された。

（２）仲間集団の形成･所属動機が仲間集団との関わりに及ぼす影響

仲間集団の形成・所属動機が仲間集団との関わりに及ぼす影響については，形成・所属動機の直接効果と集団の特徴を媒介とした間接的影響の双方について検討した。仲間集団の関わりを基準変数とし，仲間集団の形成・所属動機と仲間集団の特徴の各変数を説明変数とする重回帰分析の結果を Table ４に示す。

直接的な影響については，男女とも積極動機から信頼感（β＝.40, $p<.001$; β＝.58, $p<.001$），消極動機から拒否不安（β＝.43, $p<.001$; β＝.44, $p<.001$）への正の影響が認められ，仲間集団の特徴に関わらず，積極的な理由が強いほど信頼感は高く，消極的な理由が強いほど拒否不安が高いことが示された。女子ではさらに消極動機から信頼感（β＝－.18, $p<.001$）への負の影響も示された。

他方，仲間集団の特徴の効果については，男女いずれも，階層性から信頼感（β＝－.16, $p<.05$; β＝－.12, $p<.05$）への負の影響，拒否不安（β＝.28, $p<.001$; β＝.17, $p<.05$）への正の影響，閉鎖性から開放性（β＝－.32, $p<.001$; β＝－.42, $p<.001$）への負の影響，凝集性から信頼感（β＝.38, $p<.001$; β＝.27, $p<.001$）への正の影響が認められ，どのような仲間集団に所属するかによって仲間集団との関わり方が影響されることが示された。

女子では，仲間集団の形成・所属動機が仲間集団の特徴に影響を及ぼすことが示されており，少なくとも女子については，仲間集団の形成・所属動機が仲間集団の特徴を媒介として，仲間集団への関わり方に影響することを示している。

Table ４ 仲間集団との関わりに関する重回帰分析結果

	開放性	信頼感	拒否不安
男子（n=130）			
積極動機	.06	.40 ***	−.04
消極動機	−.16 †	−.03	.43 ***
仲間：構成人数	.12	−.05	−.13
仲間：階層性	−.01	−.16 *	.28 ***
仲間：閉鎖性	−.32 ***	.07	.09
仲間：凝集性	.23 **	.38 ***	−.12
R^2	.20 ***	.42 ***	.32 ***
女子（n=181）			
積極動機	.14 †	.58 ***	−.13 †
消極動機	.06	−.18 ***	.44 ***
仲間：構成人数	.03	−.05	−.02
仲間：階層性	.01	−.12 *	.17 *
仲間：閉鎖性	−.42 ***	.08	.06
仲間：凝集性	.06	.27 ***	−.04
R^2	.22 ***	.57 ***	.42 ***

注：*** $p<.001$，** $p<.01$，* $p<.05$，† $p<.10$

考　察

1．仲間集団の特徴における男女差

仲間集団に所属している生徒の割合は男女とも８割を超えており，多くの中学生は特定の仲間集団に所属しながら学校生活を送っていることが示された。

仲間集団の特徴については，構成人数と閉鎖性において男女差が認められ，女子の仲間集団は男子にくらべて小さく閉鎖性も高いことが示された。従来の研究でも，女子は男子にくらべて相互に独立した排他的で閉鎖的な仲間集団を形成する傾向が強いことが指摘されており（石田 , 2003; 楠見 , 1986），本研究の結果はそれらの知見と一致する。他方，階層性や凝集性については，従来の知見とは異なる結果であった。たとえば階層性に関しては，男子は女子にくらべて階層性の高い仲間集団を形成し，女子は凝集性の高い集団を形成することが指摘されているが（楠見 , 1986），本研究ではそれらの違いは見出せなかった。このような結果については，男女の仲間集団における閉鎖性の違いが関連しているのかもしれない。先述したように，女子の仲間集団は男子にくらべて構成人数が少なく閉鎖性が高いことが示されており，集団間の境界が明確で構成成員もはっきりしていると考えられる。このような閉ざされた仲間集団内での上下関係は認識されやすいのに対し，男子の仲間集団では集団境界が不明瞭であるために，そこでの階層性が認識されにくかったと思われる。このような階層性に対する男女差に関しては，女子は男子にくらべて集団内の上下関係や階層性に敏感で，階層性の認知が学級満足感を大きく低下させることも報告されている（石田 , 1999）。このような仲間集団としての顕現性や階層性に対する敏感さに関する男女差が，本研究の結果には関連している可能性が考えられる。この点については，今後，検討していく必要があるだろう。

2．仲間集団の形成･所属動機が仲間集団の特徴，仲間集団との関わりに及ぼす影響

仲間集団の形成・所属動機が，仲間集団の特徴に及ぼす影響については男女で大きな違いが示された。

まず，仲間集団の形成・所属動機の男女差の分析結果から，女子は男子にくらべて，情緒的な繋がりや友人からのサポートを得るために仲間集団を形成し所属しようという積極的な動機づけも，ひとりで浮いた存在になりたくないからといった消極的な動機づけも有意に高いことが示された。女子は男子にくらべて，友人に対して情緒的な繋がりを求める傾向が強いだけでなく，女子では相互に排他的な小集団を形成するために，仲間集団に所属していなければ，一緒に行動をともにする友人をもてなくなる可能性があるし，仲間集団に所属しているかどうかが他の人にも認識されやすくい。このような排他的で閉鎖的な仲間集団のあり方が，女子の仲間集団への動機づけを高めていると考えられる。

仲間集団の形成・所属動機が仲間集団の特徴や仲間集団との関わりに及ぼす影響についても，男女で異なる結果が示された。仲間集団の形成・所属動機が仲間集団の特徴に及ぼす影響については，男子では積極的な動機が仲間集団の階層性と凝集性に正の影響を及ぼすことが示されただけだったのに対し，女子では積極的な動機づけだけでなく，消極的な動機づけも形成される仲間集団の特徴に影響を及ぼしていることが明らかとなった。なかでも，女子の消極的な動機づけの高さが，階層性と閉鎖性に正の影響を及ぼし，構成人数と凝集性に負の影響を及ぼすという結果は注目に値する。なぜなら，階層性や閉鎖性の高さや凝集性の低さは，仲間集団の特徴としては好ましくないものであるからである。以上の結果は，女子の仲間集団は男子にくらべて，積極的であれ消極的であれ何らかの動機や意図をもって形成される側面が強いことを示しているだけでなく，女子の消極的な動機づけは好ましくない仲間集団の形成に寄与している可能性を示しているといえるだろう。

このように，本研究では，男子と女子では仲間集団の形成・所属動機に違いが認められ，またその結果，形成される仲間集団の特徴にも多少の違いがあることが示された。ただしその一方で，形成された仲間集団の特徴が仲間集団との関わりに及ぼす影響については，男女でそれほど大きな違いのないことも明らかとなった。すなわち，男女いずれにおいても，階層性から信頼感への負の影響と拒否不安への正の影響が認められ，仲間集団の階層性は仲間集団への信頼感を低下させ，仲間集団からの拒否不安を高めることが示された。また閉鎖性は開放性に負の影響を及ぼし，凝集性からは信頼感に正の影響が認められ，仲間集団の成員が閉鎖的であるほど自分も集団外の成員との交流は低下し，凝集性が高いほど仲間集団に対する信頼感は高められることが示された。仲間集団の特徴が仲間集団との関わりに及ぼす影響については，男女で大きな違いはないにもかかわらず，女子の仲間集団がとくに問題とされるのは，男子の仲間集団は各個人の動機や意図とは別の要因によって仲間集団が形成される側面が強いのに対し，女子では仲間集団に所属せざるを得ないという消極的な動機づけが，排他的で閉鎖的といった好ましくない特徴をもった仲間集団の形成を助長し，さらにこのような仲間集団のあり方がますます女子の消極的な動機づけを助長するといったように悪循環に陥っていることが関連しているようにも思われる。今後は，このような悪循環を断ち切るにはどのような取り組みが可能なのかについても検討していく必要があるだろう。

引用文献

天野降雄　1985　女子生徒のインフォーマル・グループ　アジア文化，10, 87－95.

Crockett, L., Losoff, M., & Perterson, A. C. 1984 Perceptions of the peer group and friendship in early adolescence. *Journal of Early*

Adolescence, 4, 155－181.

Karweit, N. & Hansell, S. 1983 Sex differences in adolescent relationships: Friendships and status. In J. L. Epstein & N. Karweit （Eds.） *Friends in school: Patterns and selection and influence in secondary schools*. New York: Academic Press. pp.115－130.

本間友巳　2000　中学校の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析　教育心理学研究 , 48, 32－41.

保坂一乙　1993　中学・高校のスクール・カウンセラーの在り方について－私立女子校での経験を振り返って－　東京大学教育学部心理教育相談室紀要，15，65－76.

井森澄江　1997　仲間関係と発達　井上健治・久保ゆかり（編）　子どもの社会的発達　東京大学出版会　Pp. 50－69.

井上健治　1992　人との関係の拡がり　木下芳子（編）　対人関係と社会性の発達　金子書房　Pp. 3－28.

石田靖彦　2002　面接法を用いた集団構造の把握－ソシオメトリック・データの比較による信頼性・妥当性の検討－　愛知教育大学研究報告（教育科学編），51，93－100.

石田靖彦　2003　学級内の交友関係の形成と適応過程に関する縦断的研究　愛知教育大学研究報告（教育科学編）, 52, 147－152.

石田靖彦・吉田俊和　1999　学級集団内の交友関係が学級満足度に及ぼす影響（1）－学級構造の認知と集団内地位との関連－　日本教育心理学41回総会発表論文集，257

黒川雅幸・三島浩路・吉田俊和　2006　仲間集団から内在化される集団境界の評定　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要，53，21‐28.

楠見幸子　1986　学級集団の対極的構造の変動と教師の指導行動，学級雰囲気，学校モラールに関する研究　教育心理学研究 , 34, 104－110.

三島浩路　2004　友人関係における親密性と排他性：　排他性に関連する問題を中心にして　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 , 51, 223－231.

Shrum, W., & Cheek, N. H. 1987 Social structure during the school years: Onset of the degrouping process. *American Sociological Review*, 52, 218－223.

永沢幸七　1969　女子学生の informal group の発生要因について（その１）　東京家政学院大学紀要 , 9, 17－27.

大嶽さと子　2007 「ひとりぼっち回避規範」が中学生女子の対人関係に及ぼす影響：面接データに基づく女子グループの事例的考察　カウンセリング研究 , 40, 267－277.

佐藤有耕・落合良好　1993　女子構成のグループの成員数と友人とのつきあい方の関係筑波大学心理学研究　15，185－193.

落合良好，佐藤有耕　1996　青年期における友達とのつき合い方の発達的変化　教育心理学研究，44，55－65.

Rubin, K. H., Bukowski, W., & Parker, J. G. 1998 Peer interactions, relationsips, and groups. In N. Eisenberg （Ed.）, *Handbook of child psychology vol.* 3 *: Social, emotional, and personality development*. New York: John Wiley & Sons, Inc. Pp. 619－700.

佐藤有耕　1995　高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析　神戸大学発達科学部研究紀要，3，11－20.

（2008年９月17日受理）

Appendix １　仲間集団の特徴の因子分析結果（最尤法，promax 回転後）

項　目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
［仲間集団の階層性（α=．71）］			
２．グループには，中心的な存在がいる	**.63**	-.06	.13
11．グループの中で，意見を言う人と言わない人が分かれている	**.61**	-.03	-.30
８．グループで何かを提案する人がいつも決まっていて，みんなはそれに従っている	**.60**	.01	-.02
17．グループの中には，みんなについていくだけの人がいる	**.57**	-.07	-.25
５．グループには，みんなを引っ張っていく人がいる	**.56**	-.14	.30
14．グループの中に上下関係がある	**.36**	.26	-.34
［仲間集団の閉鎖性（α=．71）］			
７．グループ以外の人を仲間に入れてあげないという雰囲気がある	.06	**.67**	.04
13．他のグループの人が自分のグループに入ってくることをいやがる人がいる	-.04	**.64**	-.04
１．グループ以外の人を受け入れられる雰囲気がある	.18	**-.64**	-.03
10．自分のグループの人は，他のグループの人と仲良くしていない	.12	**.45**	-.08
４．グループの人たちは，いつもグループ内の人とだけ遊んでいる	.19	**.44**	.27
16．グループ以外の人とみんなよく遊んでいる	.18	**-.44**	.07
［仲間集団の凝集性（α=．64）］			
６．グループの中のみんなは仲が良い	-.05	-.09	**.60**
３．グループの団結力はつよい	.28	-.03	**.60**
18．グループのみんなが一緒に遊んだり活動することが多い	-.05	.14	**.57**
15．グループには，だれにもえんりょすることなく，言いたいことを言える雰囲気がある	-.08	-.07	**.50**
（残余項目）			
12．グループ内の友だちは特別であるという雰囲気がある	.15	.27	.25
９．グループで孤立している人はいない	-.09	.05	.26
因子間相関Ⅰ		.46	.02
Ⅱ			-.07

Appendix 2　仲間集団との関わりの因子分析結果（最尤法，promax 回転後）

項　目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
［仲間集団外への開放性（α=．82）］			
21．私は，グループ以外の友だちとも仲良くしている	**.85**	.03	.02
20．私は，グループ以外の人とも友だちでいると思う	**.83**	.09	.04
11．私は，グループ以外の友だちも多い	**.73**	−.04	−.04
16．私は，グループの人とだけ遊んでいる	**−.58**	.17	.21
１．私は，できるだけ多くの友だちを作りたいと思っている	**.50**	.22	.20
６．私は，グループ以外の人とよく遊んでいる	**.43**	−.17	−.06
［仲間集団に対する信頼感（α=．76 ）］			
３．グループの友だちとは，気持ちが通いあっている	−.02	**.75**	.15
７．グループの友だちとは何でも本音で話し合っている	−.06	**.69**	−.02
８．グループの友だちは私のことならだいたい知っている	.03	**.67**	.08
17．グループの友だちは私を絶対裏切らないと思う	.00	**.47**	−.11
２．グループの友だちにはありのままの自分は出していない	.05	**−.41**	.20
12．グループの友だちには自分の考えていることを全部言っていない	.09	**−.41**	.22
13．自分はグループの友だちに，十分受け入れられていると思う	.10	**.38**	−.13
［仲間集団からの拒否不安（α=．77）］			
９．友だちに仲間はずれにされないかと不安になる	.01	−.02	**.74**
18．友だちからどう思われているか気になる	−.02	.11	**.71**
14．友だちと意見が違うと不安になる	−.01	−.13	**.66**
４．友だちの考えていることがわからなくなって不安になる	−.04	−.18	**.61**
15．グループのみんなと同じことをするようにしている	−.02	.10	**.39**
（残余項目）			
19．グループの友だちとおそろいのものを持っている	−.03	.33	.12
５．グループのみんなと意見が違ってもできるだけ自分の意見を言う	−.01	.28	−.07
10．グループの友だちと一緒にいても友だちに流されないようにしている	.09	.12	.08
因子間相関Ⅰ		.20	−.12
Ⅱ			−.28

Appendix 3 仲間集団の形成・所属理由の因子分析結果（最尤法，promax 回転後）

項　目	Ⅰ	Ⅱ
［消極動機（α＝．91）］		
10．グループでいないと，周囲から浮いているように見えるから	**.85**	−.03
９．グループに入っていないと教室にいずらいから	**.79**	−.01
13．グループに入っていないと，変わった人だと見られそうだから	**.78**	−.06
３．ひとりぼっちな人だと思われたくないから	**.77**	.09
７．ひとりきりでいると，つまらない人だと思われそうだから	**.77**	.08
１．ひとりで行動することばかりだと，よくない印象をもたれそうだから	**.72**	.07
11．まわりの人たちみんながグループをつくっているから	**.72**	−.09
［積極動機（α＝．88）］		
12．グループだとお互いによく知っているので相談しやすいから	−.05	**.84**
５．グループの中では安心してなんでも話せるから	−.15	**.79**
14．相談相手がたくさんいて頼りになるから	−.02	**.77**
２．悩み事があるときに，みんなが相談にのってくれるから	.00	**.76**
８．落ち込んでいてもみんなで支えてくれるから	.00	**.73**
６．困ったときにいろいろ手伝ってもらえるから	.20	**.55**
４．グループの人は自分を頼りにしていろいろ話してくれるから	.13	**.53**
因子間相関Ⅰ		.17